

2 自分を知る（分を知る）

箸の上げ下ろしの注意が出来れば、次に心掛けることは“自分を知る”ことである。自分を知るとは「分」を知ることであり、「分」とは身の^{ほど}程や立場のこと、あるいは為すべきツトメのことである。渋沢栄一は、「私は蟹は甲羅に似せて穴を掘るという主義、渋沢の分を守るということを心掛けておる」（「蟹穴主義が肝要」『論語と算盤』所収）と述べている。

社会人には才能や適性または置かれた立場で為すべき役割がある。社長には社長の役割があり社員には社員の役割がある。その役割を分担することで社会の秩序は成り立っており、それはある種の棲み分けとも見做され得る。

置かれている立場で、定まった職分（周りから期待されている行為）を忠実に務めること、即ち立場と言行の一致を果たし、自分に与えられた役割を真摯に果たすことが求められる。これを「分を知る」あるいは「分に応じる」という。

そもそも、会社組織はジグゾーパズルのようなものである。多様なピースが集まって全体を構成しており、個人というピースの替え（形の交換）はあるが、個性を具えたピースを変えた途端に全体の絵柄は変ってしまう。会社組織を有効に活用して業績を上げるためには、常に全体を意識すること、全員でどのような絵柄とするのかというコンセンサス—会社においては企業理念やミッション、目標として提示される—を必要とし、その上で、全体の中での「分」を各人が自覚して果たさねばならない。

全員のコンセンサスの下に各人が「分」を尽くす様は、オーケストラのようなものである。各楽器は楽曲を演奏するために全て必要とされるが、演奏者が自分勝手な演奏をすると全体が壊れてしまう。目立つところでは目立ち、目立ってはいけないところでは控え目に。役割（分）を尽くすことで全体が整い、聴く人の心に響くのである。

必要とされることは、我執を排して全体の中に加わるという姿勢。全体を先にして私を後にする、あるいは全体における部分として存在することの自覚である。その意識を基盤として、自分の能力を最大限に発揮して与えられた役割を果たすところに、自分の存在価値が生まれるのである。

このことを渋沢栄一は、「規律を重んじて、上役の命令に違背せず、自らその分限を守るは、（中略）もっとも注意すべき要件である」（『渋沢栄一訓言集』p 80）と語っている。但し、分に安んじて進取の気性を忘れてしまつては何もならない。組織は生き物であるから、行動においては分相応でありつつも、望みにおいては分不相応でなければ発展がない。分に安んじつつも、「健全な野心」をもって進まなければならないのである。

分を知らない者や分を弁えない者に対しては、周囲がその振舞いを叱る場合がある。特に若い時代には、心ある先輩からよく注意される。その時、叱られたり注意されて反感を持ち、不愉快な態度を示してはいけない。自分の進歩がそこで止まってしまう。叱ってもらうことの有難さを知るよう努力することが大切である。

留意してほしいのは、「分」とは固定的なものではなく、向かい合うメンバーで変化するものということである。置かれた立場によって、またTPOによって変化していく。固定

的な“自分”というものはなく、間柄が“自分”を作ってくれるのである。別の観点から言えば、「分」を与えられることは自分の居場所をつくってもらうことでもある。

そこに思いが至れば、間柄を作ってくれた人々への感謝の念が生まれ、その感謝の念は思いやりの精神を醸成する。ただし、間柄を過剰に意識すると人の思惑を気にすることになるから、この様な方向に心が向かないように注意してほしい。

自分（自らの分）を知れば、他人の無意味な批判を気にすることもなくなり、ありのままの自分を曝け出すことが出来る。良く思われたい、良く見られたいといった我執に囚われると作為に陥り、余計な気を遣うことになるが、分を尽くそうと心がけておけば自然体で臨むことができ、そこから独立自尊の自覚も芽生えてくる。

個性とは無制約の中から生れるものではなく、分というある種の制約の中で自覚され、発揮される。制約があるところには必ず摩擦が生じる。自分の個性に端を発する欲望と所与の制約との間に齟齬が生じるためである。この摩擦を振り返ることで個性が自覚でき、摩擦解消のための方途が単なる我儘とは異なる個性が発揮される。

このようにして発揮された個性は他を同化する作用をもつ。恰も、サッカーの試合においてFWを代えたとき、代えたFWの質で全体のフォーメーションが大きく変わってしまうことがある。

では、「分」はどのようにして知ることが出来るのであろうか。周囲の人の叱責や助言によって知ることもあるが、大人の社会では事細かに教えてくれる人はいないわけで、結局は、自分で知る以外に方法はないのである。

渋沢栄一は、「人らしく、男らしく、女らしく、親らしく、子らしく、金持ちぶるな、学者ぶるな、才子ぶるな、処世の要諦はこの「らしく」「ぶるな」の二語に在る」（『渋沢栄一訓言集』 p 445）と語っている。また、「「ブルナ」「ラシク」の俗語は、実に中庸を包含したる言葉である。人はその起居動作、常にこの俗語を服膺すれば百事そのよろしきを得て、天下国家も治まるのである」（同上 p 263）とも述べている。

人は誰しも何らかの、また幾つもの役割を持っている。家にあっては親として、親に対しては子として、会社においては社員として、近所にあっては隣人として等々、「～として」という役割がある。その役割を「あるべきように」務めるところに、「らしく」と「ぶるな」が実現するのだろう。分とは天上から降ってくるものではなく、足元に転がっているものなのである。